

博士論文要約

張恨水の小説における創作思想の変遷に関する研究

序章

張恨水(1895-1967)は、近現代中国の通俗小説の作家である。1920年代、新聞連載小説『春明外史』及び『金粉世家』によって新聞業界で頭角を表し、1929年作『啼笑因縁』によって市民階層の読者からの支持を得た。一方、彼の作品に青年男女の恋愛が描かれたことから、鴛鴦蝴蝶派の代表作家と見なされ、新文学が主流を占めた文壇からは長期にわたり批判されていた。

1980年代後半になり、それまで埋もれていた鴛鴦蝴蝶派の作品が再評価されると、張恨水の作品もまた見直されるようになった。近年、張恨水について論じられた研究は増加傾向にあり、一定の成果を収めているものの、張恨水の創作思想の全貌を対象とした詳しい研究は現状ごくわずかと言ってよい。そこで、本研究は、「伝統批判」という時代背景を踏まえ、張恨水と新文学派の関係を時系列に沿って追いながら10編余りの小説を体系的に読み込むことで、張恨水の創作思想とその変化を追うことを主たる目的とする。この過程で、以下5点の解明を試みる。

第一に、張恨水が鴛鴦蝴蝶派とされた原因は何か、また張恨水の小説と鴛鴦蝴蝶派の小説はどのような関係にあるのか。第二に、新文学派からの批判にさらされていた原因は何か。第三に、張恨水の小説はいかなる変化を遂げたか。第四に、張恨水が伝統文化に執着する理由は何か。第五に、張恨水の文化をめぐる立場をどのように評価すべきか。

上記の5点を解明する上で、張恨水が中国伝統文化の価値を再発見・再評価したことを踏まえて、彼の作品に真の価値を見出したい。

さらに、本研究では、従来の研究で十分に上げられてこなかった課題にも取り組む。例えば、「陰柔」と「陽剛」の関係から、張恨水と新文学派の関係をどのように捉えるべきか、梁啓超の主張と張恨水の思想にどのような関連性があるか、また、文化保守主義者としての張恨水にどのような価値があるのかなどである。これらの分析を通じて、従来の諸研究の不足を補いたい。本研究が期待する成果は、「鴛鴦蝴蝶派」という蔑称の裏に隠れている張恨水の様々な取り組みを見落とさず、「張恨水の真の努力」を明らかにすることである。

第1章 「陰柔」と「陽剛」の対立——『春明外史』と『啼笑因縁』における男性像の解読

張恨水文学研究において、特に重要な地位を占める作品と言えば、出世作『春明外史』と代表作

『啼笑因縁』の2作である。この2つの作品は、すでに様々な角度から学術的に分析されている。それでもなお、筆者が両作品を読み解くのは、従来の研究では見落とされがちであった点に疑問を持ったからである。すなわち、女主人公が危機に陥るたび、男主人公が家庭の事情を口実に女主人公のもとを立ち去るという点である。

無論、それは運命の定めであるということを際立たせ、物語を展開させるという意図で取り入れたものだと解釈できる。しかし、それを中国古典の才子佳人小説に登場する旧式才子のイメージから考えれば、別の解釈が浮かび上がる。それは、文弱な書生として描かれている才子たちは問題解決能力(男気)に乏しいということである。この特徴は古代才子佳人小説や、民国初期の鴛鴦蝴蝶派小説に限らず、張恨水が1920～30年代の初めに発表した小説にも表れている。

従来の研究では、張恨水及び鴛鴦蝴蝶派が非難された理由は、その娯楽性を求める文学観が、芸術性を重視する新文学派と異なるからであるとされてきた。本章では、男気の欠如という点を踏まえて、張恨水の初期の作品と鴛鴦蝴蝶派との関係、さらに張恨水及び鴛鴦蝴蝶派が新文学派の批判にさらされた原因を再考したい。

才子とは、文才に恵まれながら鶏を縛る力もないほど弱々しい読書人を指す。その性格は伝統文化の影響により「陰柔」で、悪く言えば女々しいところがある。「陰柔」な気質には優しい、穏やか、おとなしい、謙虚、感性豊かといった長所もあるが、弱々しい、臆病、悲観的、不器用、優柔不断といった短所も目立つ。清代末期、中国は内憂外患の混乱期を迎え、新文学派は救国のために「陽剛」な気質を以て尚武の精神を養うべきであると主張していた。そのため、国民の「陰柔」な気質は問題視されていた。

1920年代の張恨水の小説に登場する男主人公は、前述の「陰柔」な気質に通じるところがある。具体的に言えば、困難に直面した際、彼らは危険に立ち向かおうとせず、あえてそれを避け、深い内省を誘うのみであったということである。こうした「陰柔」による軟弱さの描写が鴛鴦蝴蝶派に通じるところであり、新文学派に受け入れられなかった原因の一つなのではないかと考える。

第2章 「社会」と「恋愛」の図式——1930年代における『落霞孤鶩』の試みと挫折

本章の研究対象は、1931年作『落霞孤鶩』である。筆者がこの小説に焦点を当てたのは、民国期の新聞を閲覧していた際、偶然「張恨水来函」という記事を発見したからである。その記事には張恨水が『落霞孤鶩』を『啼笑因縁』よりも優れた作品であると明言したことが書かれていたが、従来の研究では、それが見落とされがちであった。というのも、『啼笑因縁』は張恨水の代表作とされ、中国近現代文学史において一定の地位を占めているからである。したがって、張恨水が『落霞孤鶩』を高く

評価した理由には興味を引かれるものがある。本章では、それを明らかにするため、『落霞孤鶩』のテキストを精読しつつ、それを時代背景に照らし合わせて分析を行う。また『落霞孤鶩』の価値を明確にする上で、1930年代初頭における張恨水の創作思想の変遷についても考察する。

張恨水が『落霞孤鶩』の価値を『啼笑因縁』のはるか上に置いた以上、両作品の比較分析は必至であろう。1930年代の初め、『啼笑因縁』は新文学派の批判的となり、特に張恨水の思想に対し批判が集中していた。例えば、作者が上流階級の生活を好意的に描いたことには小ブルジョア意識が反映されており、非写実的な侠客を描いたことには封建的思想が反映されている。新文学派によるこれらの指摘は、『落霞孤鶩』を理解する上で重要な視点となる。

『啼笑因縁』が文壇に批判されたことを受け、『落霞孤鶩』では、張恨水の思想が明らかに変化している。まず、上流社会の煌びやかな部分は描写せず、代わりに上層階級による下層階級への抑圧を描き出し、作品に社会批判という意義を持たせている。次に、幻想的な侠客の描写を意図的に避け、女主人公自身に独立心と反抗心を持たせた。さらに、恋愛物語を描くにあたっては、青年男女の恋愛ではなく、既婚男性と関係を持った女主人公の悲劇に焦点を当てた。それにより、近代以降の中国社会に蔓延していた「自由恋愛」思想による社会問題（不倫や略奪愛）に警鐘を鳴らした。このように、張恨水は伝統的な倫理道德を遵守するという立場で、それを犯す行為への批判を恋愛物語の中核に置いたのである。

要するに、『落霞孤鶩』は社会的意義と倫理的意義を兼ね備えた作品である。『落霞孤鶩』に見られる変化から、1930年代初頭の張恨水が、新文学の長所を認め、自身も時代に追いつこうと奮闘していたことがわかる。しかし、彼の作品は伝統的な倫理道德の影響が色濃く、その点では新文学派の理想には届かなかった。

第3章 「伝統」と「現代」の狭間で——時代の変革期における張恨水の折衷的立場

五四運動後、西洋思想の提唱と、それに反する儒教への批判が文壇の主流となった。それによって「反封建」が新文学の作品の中核となり、イブセンの『人形の家』に登場するノラのように個性の解放を追求する登場人物が重要なシンボルとなった。

1930年代半ば頃の張恨水の作品で、反封建的な傾向が強く表れているのは『錦片前程』や『北雁南飛』などであろう。『錦片前程』の女主人公は典型的な新式女性として描かれ、「中国人のノラ」と呼ばれた。彼女は、自身の恋愛に対し家族から干渉されることに耐えかね、家庭を牢獄と見なし、最終的に家を出たのである。そして、家の扉を閉めて家を飛び出したという行為から、『人形の家』の影響が窺える。一方、『北雁南飛』では、年齢層の異なる三人の女性、老女、婦人、そして少女に焦点が

当てられ、それぞれの物語で、貞操をはじめとする儒教的婦徳がどのように女性を束縛したかが描き出されている。さらに、張恨水は物語の終盤で女性解放の重要性を際立たせ、一筋の光明を指し示した。これらの作品から、1930年代半ば、張恨水が伝統文化における封建制度の問題点を認め、西洋の近代的な思想へさらに一步踏み出したということがわかるだろう。

そうはいっても、張恨水は西洋思想に完全に賛同したわけではない。ほぼ同時期に発表された『現代青年』と『似水流年』では、農村の青年男女が都会に足を踏み入れ、行きすぎた自由主義の影響でプレイボーイやモダンガールに成り果てたという物語が描かれている。作品では、農村と都市、伝統と現代、向上と墮落の対比から、物質や金銭を崇拝する西洋の功利主義文明が伝統的精神文明の墮落を招きかねないという憂慮を汲み取ることができる。その上で、張恨水は中国人の伝統的精神の重要性を改めて訴えた。言い換えれば、近代化に伴う悪影響に対し、中国の伝統文化に処方箋を探る必要性を提示したのである。

要するに、1930年代半ば、張恨水は社会問題の暴露に限らず、その解決にも取り組んだ。そして、本章で取り上げた作品を見ると、張恨水の思想には折衷性が認められるものの、同時に彼が「伝統」と「現代」の狭間で苦闘する姿も目に浮かぶ。

第4章 「啓蒙」と「救亡」の課題——抗戦期における中国伝統文化に関する張恨水の再思考

日中戦争勃発後、すなわち1930年代後半、左連が解散し、新しい文学団体である中華全国文芸界抗敵協会（以下、文協と略称する）が発足した。「抗戦」という目標のもと、団結し得るすべての知識人と手を取り合おうというのが文芸界の共通意識であった。文協の成立に伴い、張恨水に対する新文学派の態度は「排斥」から「受容」へと転換した。一方、文協に受け入れられた張恨水も「文章下郷」と「文章入伍」という文協のスローガンに積極的に応え、民衆を抗戦に動員することを目指した作品を多く発表した。

そして、より庶民が親しみやすい形で文芸作品を創作しようという「文芸の大衆化」が謳われる中、文協は中国の伝統文化に対し、五四期以来の否定的な態度を一変させ、取捨選択して継承すべきだと主張し始めた。こうした時代背景のもとで、『史記』『遊俠列伝』や古典小説『三国演義』から影響を受けた張恨水は、作品中で「俠」や「忠」といった強靱な伝統精神を説いている。

中でも、民衆の生活を題材とした『丹鳳街』と『秦淮世家』は、「俠」という中国古来の思想を中核として物語が展開されている。『秦淮世家』において、義侠心に富む下層階級の人々は貧しいながらも助け合って生きていた。上流階級の暴挙により庶民女性が悲劇に見舞われた際、彼らは危険を顧みず女性の救出に奔走した。また、『丹鳳街』の終盤では、下層階級の人々が兵役に就き、日本軍の侵略

に抗うという場面が組み込まれている。このように、彼らは「人を助ける→人を救う→国を救う」という段階をたどりながら、侠の精神を養っていったのである。

また、軍人の生活を題材とした『大江東去』と『楊柳青青』では、抗戦期における「忠」の重要性が強調されている。作品では、国家に忠誠を尽くす中国軍人の献身的な愛国心、戦友同士の深い絆による忠義心、さらに軍人の夫を支え、家を守る妻の忠誠心が讃えられている。このように、「忠」は抗戦期の軍人の士気を高め、安定させるものとして明確に位置づけられていたのである。

1940 年前後の張恨水の作品を、それ以前のものと比較してみれば、小説の登場人物の性格が大きく変化していることがわかる。すなわち、彼らはもはや弱々しい才子佳人ではなく、剛毅な心を持つ英雄女傑となり、不屈の闘争心を持つようになった。この変化は、張恨水が中国の伝統文化を以て「陽剛」な気質を養おうとした努力の結果である。このように、張恨水は時代の要求に応え、鴛鴦蝴蝶派の嚆矢とされた『玉離魂』のような哀傷漂う男女の恋愛物語から脱却した。

終章

本研究の発端となった問いは、「張恨水が鴛鴦蝴蝶派とされた原因は何か、また張恨水の小説と鴛鴦蝴蝶派の小説はどのような関係にあるのか」また、「新文学派からの批判にさらされていた原因は何か」の2つである。結論としては、以下の通りである。

張恨水の初期作品を見ると、登場人物が嘆き悲しむ様子が多く描かれている。その点では、当時の張恨水は鴛鴦蝴蝶派の系譜から外れていない。ただ、張恨水の後期作品に登場する主人公たちには、徐々に勇ましく力強い一面が表れるようになり、それと同時に、小説のスタイルも鴛鴦蝴蝶派の感傷的な雰囲気から乖離した。これにより、張恨水に対し、安易に鴛鴦蝴蝶派のレッテルを貼ることはできないと考えられる。

また、張恨水が新文学派からの批判にさらされた根本的な原因については、中国の伝統文化に関連づけて考えることができる。簡潔に言えば、「伝統」の賞賛と批判という立場の相反によるものであると言える。

次に、1930年代から1940年代にかけて、張恨水が作品にどのような思いを込めたのか、その変遷を追った。当時の張恨水は、一方で新文学派の創作方法や思想に寄り添う姿勢を以て新時代に追随しようと努めており、他方で近代化に伴う道德心の喪失を嘆き、伝統の重要性を訴えた。また、抗戦勃発後、中国の伝統文化である「侠」と「忠」から国を救う処方箋を探ろうと試みた。

「啓蒙」「革命」「救亡」と時代の課題が移り変わる中、新文学派の思想は西洋思想を主体としていた。それに対して、張恨水の思想には一貫して伝統思想、とりわけ儒教思想が影響し続けていた。このよ

うに、西洋化の必要性を主張した新文学派が文化急進主義者であるならば、張恨水は文化保守主義者と位置付けられる。

ただ、文化の多様性という視点から見れば、新文学派と張恨水の立場は、決して対立しているのではなく、共存し得るものとも言える。亡国の憂き目に直面した際、新文学派は文学の革新、新しい形式や新思想の探求に重要な役割を果たした。それに対して、張恨水は、中国伝統文化の価値の再発見・再評価という点でかけがえのない役割を果たした。

要するに、張恨水の保守性とは、新文学派の作風を頑なに拒否するものではなかった。むしろ、張恨水は近代化による社会問題を目の当たりにして、中国にはやはり「伝統」という否定できない「固有の血」が流れており、近代化に走る今だからこそ、中国の伝統思想に再び光を当てることに意味を見出したのではないだろうか。